

日常着に込めた熱い思い

名古屋市昭和区の地下鉄鶴舞線いりなか駅近くのブティック「コットンウール」。白とブルーを基調にした店の外装は、店のテーマ「着心地の良い日常着」にふさわしいアットホームなムードが漂っている。森敬祐（けいすけ）さん(31)は、この店のオーナーであり、オリジナルブランドのデザイナーでもある。

「売る」「作る」を経験

若いころから人一倍おしやれに興味があった森さん。「高校から大学と、恐ろしいくらい服にお金を使いましたね」と苦笑する。

一度は東京でテレビ番組の制作会社に勤務したものの、名古屋に戻り、トラッドショップの販売員として、ファッション界でのキャリアをスタートさせた。

「とにかく物を作る仕事でした。最初はマスコミ業界を目指しましたが、服飾の方が合っている気がして。自分の店を持つために、働きながら勉強しようと思ったんです」

接客や店の運営など、ショップ経営の基本を学んだ後、洋服の生産現場である縫製工場へ。単に店を持つだけでなく、自分のデザインしたオリジナルブランドを立ち上げたいという思いからの転職だった。

「パターン（型紙）起こしから裁断、縫製まで、作業を一通り経験しました。社長が熱心な方で、素材に合わせた裁断、縫い方なども仕込んでくれたんです」

長く愛用してほしい

このころ、森さんがデザインしたTシャツを知人のショップで販売したところ、予想以上の評判を得た。これで自信を深め、オリジナルデザインを中心とした品ぞろえで「コットンウール」をオープンした。

ホームページも活躍

生産数の少ないオリジナルブランドは、個性的なデザインが主流。しかし森さんの作品は、小さなこだわりを積み重ねたベーシックなデザインが特徴だ。

「Tシャツなどカジュアルな衣料は、業界でも軽く扱われることが多い。でも日常着こそ、襟のあきや身ごろのラインなど、細かなところが着心地や全体の印象を左右するんです」



服飾デザイナー
森 敬祐さん

毎日の暮らしの中から、ふつふつとわき上がってくるイメージ。それを型に起こし、サンプル品を縫い上げ、自ら着て形やフィット感をチェックする。「洗濯の多い日常着だけに、洗った後の形崩れまで計算します。長く愛用してもらいたいですから」

ようやく満足するサンプルが出来上がったところで、生産を外注する。数が少なくても手ごろな価格が実現できるのは、縫製現場での経験が大きい。

商品は自分で接客して販売する。何気ないデザインだけにできるだけ試着してもらい、フィット感や風合いを肌で感じてもらうようにしている。「自分の思い入れが伝わったときは、や

っぱりうれしい」

1年前からは、得意のコンピュータを生かして店のホームページも開設した。その様子が雑誌で紹介されたこともあり、全国から注文が舞い込んでいる。また、顧客とのコミュニケーションにも役立てている。

たかが服、されど服。男も女も、どんな年代でも気持ちよく装うことは、心を豊かにしてくれる。森さんの作る服は、そんな温かさで満ちている。（フリーライター・久田 結花）

このコーナーへのご意見は、〒460 8511 中日新聞編集局「イブニングユース係」（住所不要）へどうぞ。専用フックスは052(201)9133です。